

入学したばかりの子どもたちは、学校の勉強に興味津々。字の書き方も、早く習いたくてしかたがないといった様子です。しかし、お手本の字をまねして何回も書き続ける（練習する）だけの授業ならば、やがて、その興味も薄れていってしまうことでしょう。そのため、子どもたちが文字について考えを巡らせるような、指導のアイデアが必要となってきます。書く前に、文字の原理・原則がどのようなものか、一年生なりに考え、それを友達と交流し、さらに気づきを深めながら書くことにつながる学習場面を設定しました。

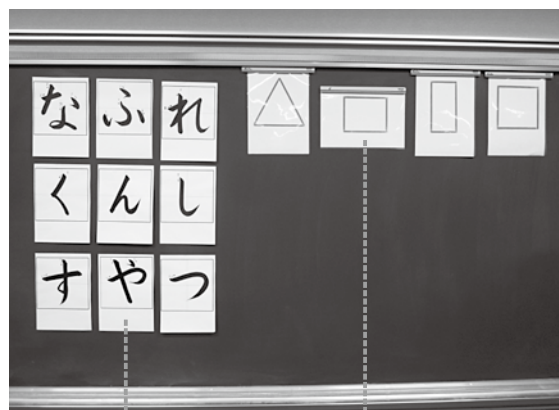
教材名 「じのかたち」

（教科書P8）

字の形（外形）を指導するときには、図形を用いることが一般的です。例えば教科書では「く」は縦長の長方形として示されています。しかし、「この字はこの図形」と、画一的に教えるだけでは、子どもたちの外形への認識は深まることにはないでしょう。そこで、どのような外形になるのかを、子どもたちが自ら考えていく学習活動を設定しました。

教具の工夫

・長方形や正方形、三角形などの枠（外形）を書いた透明のシートを、黒板に掲示する。
・画用紙などに字を書いた、文字カードを作成する。
※パソコンで作成し、電子黒板等で提示することも考えられる。



文字カード

枠を書いた透明シート

指導の実際

①シートに書いた図形の枠を部屋にたてて、子どもたちに、「この形の、お部屋に入る字は、どれでしょうか。」と問う。

②透明シートの下から、文字カードを少しずつ挿入していく。子どもたちは、自分たちの選んだ文字が部屋（外形）に入るか、興味をもって眺め、黒板に注目していた。

③文字が枠内にぴったりに入っているか確かめる。

・入っていないければ、なぜ入らないのかを考え、入りそうな部屋を探させる。入っていたら、他にも合いそうな部屋がないか、別のものでも試してみるようにする。

・それぞれの文字にふさわしい外形があることを知り、外形に留意して書くことを確かめる。

④外形を枠取ったワークシート等を使用し、書く活動を行う。学習指導書付録CD-ROMを活用することもできる。

このように、外形を部屋に見立て、それなどの文字が収まりそうかを考え、話し合いながら書くことで、子どもたちの外形への認識は深まっていくことでしょう。



▲長方形の枠を書いた透明シートの下から、「つ」の文字カードを差し込んでいく。



▲「つ」の外形は長方形なので、文字が枠内にぴったりと合います。

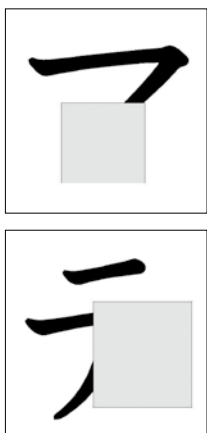
2 教材名 「かたかな 大しゅうごう」

（教科書P18）

片仮名の画は直線的であり、字形が似通ったものが多くあります。そのため、少しの違いで別の片仮名になってしまうことも起こりがちです。書く際には、似ている片仮名の、違う部分を理解しておくことが肝要です。子どもたちが自身のその違いに気づけるよう、次のような指導の工夫をしました。

教具の工夫

・片仮名とそれを隠す図形をパソコンで作成し、大画面に投影する。



▶例えば、上の図では、隠れている片仮名が見える。下の図では、隠れている片仮名が見える。

・片仮名の文字カードを用意する。



▲教科書 (P12・13)
を横に置き、形をよく
見ながら、粘土の字を
形作っていく様子。



何も見ないで作った字
(左側)に比べ、教科書
をよく見ながら作った
字(右側)のほうは、
字形がより正確に再現
されている。



側(に作る)。子どもたちは、わくわく楽しみながら形作っていた。

④同じ平仮名を、教科書を見ながら、粘土で作るようにさせる(粘土板の右側に作る)。今度は、画の長さや方向、止め、はね、払い等に気をつけながら作っていくことを指示して、それらの点を注意深く見て、考えながら字を形作っていた。

⑤全員が作り終えたら、左右二つの粘土の字を比べて、整ったところを発表し合う時間を設ける。友達のものについて、どこがどのように変わったのか、気づいたことを発言させるようにする。二つの字の違いについての驚きと称賛の声を聞いて、発表した子どもはともうれしそうにしていた。

⑥自分の発見した課題点を意識しながら、ワークシート等に平仮名を書く学習をする。

粘土で字を作ること、細かな点にも目が向き、じつくりと文字に向かい合うことができます。また、それは、既習の学習を生かしながら、どのようにしたら正しく整った文字にすることができのかを考えることにもつながります。発表で友達に伝えることを通して、課題が明確になり、筆記具を使用するときにも、それを意識しながら書くことができるようになるでしょう。

入学したばかりの子どもたちにとって、学びと遊びの境界線はきわめて不明瞭といえます。子どもにとっては字を書くのも遊びのうち。字を書くことは楽しいことのひとつです。そして、いろいろな字を学んで書けるようになったことを素直に喜びます。そのような、文字に対する興味や学ぶ意欲を、いつまでももち続けていってもらいたいです。

そのために、教材や教具に工夫を凝らし、子どもたちが進んで考え、それを友達と互いに交流させながら、学びを深めていく学習の場面を生み出していきたいと考えています。新学期のスタートにあたり、一年生の子どもたちが楽しんで取り組む書写授業を実現するための、アイデアをご紹介します。

指導の実際

①部分を隠した片仮名を、プロジェクターなどを使って提示する。子どもたちは、どの片仮名なのかを推測するように促す。推測から出された片仮名の文字カードを黒板に掲示していく。

②子どもたちの反応を見ながら、隠している部分を徐々に明らかにしていく。「ユ」の場合、初めは「ニ」にも「コ」にも「エ」にも見える。隠れた部分を少しずつ明らかにしていく過程で、画の長さや方向、画の間

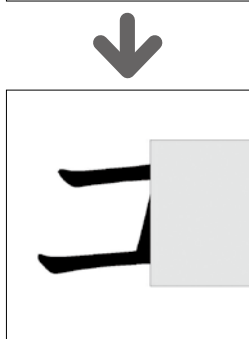
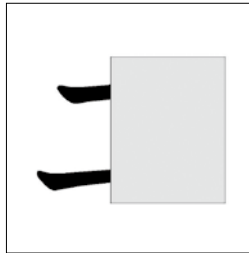
どを手がかりに、子どもたちは、どの片仮名なのかを類推するようになる。

③どの片仮名かが明らかになったところで、子どもたちからの発言を整理しながら、その片仮名の特徴を確認する。

④形の違う部分に気をつけながら、書く活動へと入る。
このような学習活動を通して、子どもたちは、楽しみながら、どこに違いがあるのかに自然に気づき、その違いを意識して書くようになる。

〈発言例〉

・「ニ」だよ。
・「ユ」じゃないかな。
・「コ」かなあ。



・「ユ」だよ。だって、真ん中の棒(縦画)が、斜めだよ。
・「コ」かもしれないよ。右の方がどうなっているのか分からない。

・「ユ」だ!
・下の棒(横画)が右に長くなっている。
・横の棒が折れて、縦の棒になっていたんだ。

3 単元名

(教科書P28)

「学んだ ことを
生かして かこう」

一年間が終わるころになると、子どもたちは、平仮名、片仮名、漢字と、たくさん文字を書けるようになります。その一方で、書き慣れてくると、整えて書くことがおろそかになりがちです。最後の振り返りの単元においては、もう一度自分の字を見つめ直して、文字を正しく整えて書く意識をもつことを身につけてほしいものです。そこで、「粘土で字を書こう(作ろう)」という学習活動を設定しました。

教具の工夫

・事前に、粘土と粘土板を準備すること
を伝えておく。

指導の実際

①自分の苦手な平仮名を発表させる。
②粘土板を半分に区切って使うことを指示する(真ん中に鉛筆などを置き、仕切りにするとよい)。
③何も見ずに、自分の苦手な平仮名を粘土で作るようにさせる(粘土板の左